



# 日本白桦派与中国作家

刘立善 著



辽宁大学出版社

# 日本白桦派与中国作家

刘立善 著



辽宁大学出版社

一九九五年·沈阳

(辽) 新登字第9号

日本白桦派与中国作家

刘立善 著

---

辽宁大学出版社出版发行 (沈阳市崇山中路 66 号)

沈阳市第六印刷厂印刷

---

开本: 850×1168<sup>1</sup>/32 印张: 20.25 插页: 1 字数: 510 千

1995年3月第1版 1995年3月第1次印刷

印数: 1—1000

---

责任编辑: 黄永恒 封面设计: 刘桂湘

版式设计: 贾莉 责任校对: 栗祥

---

ISBN 7-5610-2940-3  
I·321 定价: 48.00 元

## 序　一

日本に「一を聞いて十を悟る」という諺がある。劉立善君は、まさにこの諺にあてはまる最もふさわしい人物だということができるであろう。彼が私の研究室の扉を敲いたのは、1985年（昭和60年）4月であった。たしか、去年亡くなった岡山大学教授小坂晋氏の紹介だったと思う。研究テーマを聞けば、「有島武郎」だと言う。私は、古典文学近代文学の別なく、日本文学を広く研究し教授する立場をとっていたから、こころよくこれを受け入れた。初対面の時、「有島武郎ならば懺悔に対する考えが重要だから、それを中心に研究しなさい。」とアドバイスした。というのは、日本の近代文学は、キリスト教の影響を受けて、自分の犯した罪とか人に打ち明けにくい秘密を公衆の前に告白すれば、すべてが許されるという、いわば告白万能の方向に進んでいた。それを最も大胆に実行したのが、自然主義の中心として活躍した島崎藤村である。藤村は、自分の心の奥底の秘密を暴露して憚らないのが至人であるという北村透谷の評論「各人心宮内の秘宮」の影響を受け、1906年（明治39年）に刊行した「破戒」を手始めに、続編と告白小説を出し続けていた。それに対して、「白樺」による人道主義の一派は、人間の罪は、神の前で、或いは公衆の面前で懺悔すればとて許される程軽いものではないとの考

えをもってこれに対抗した。中でも有島はその最右翼をもって任じていた。

劉君は、私の指導のもとに、その問題を真剣に検討した。1986年（昭和61年）4月、岡山大学大学院文学研究科に入学した彼は、一年間ひたすらその研究に没頭し、1987年3月刊「岡大国文論稿」15号に、論文「懺悔をしない有島武郎」を公にした。これは、1914年（大正3年）1月の「白権」に発表された「お末の死」を中心に論じたものであった。札幌の貧しい床屋の子で十四歳の少女であったお末は、自分の過失から姉の子と弟の力三を死なせてしまう。その過失の原因をお末は最後まで打ち明けず、遂に毒を飲んで自殺する。有島は、そこに人間の犯した罪はどんなにしても消えない厳しさを書こうとしたというのが劉君の趣旨である。この論文は、有島の研究会で話題となり、有島の懺悔観について論争が巻き起こっているということである。それから二年、1989年（平成元年）3月、大学院を修了するまでに、彼は幾篇かの論文を書き、修士論文には「有島武郎の悲劇の軌跡」を提出した。その後、更に一年国語教育研究科で、「日中比較国語教育」の研究を続け、1990年（平成2年）に帰国した。

帰国後の劉君の研究は、更に進展し、有島の「惜しみなく愛は奪ふ」と「生活と文学」の中国訳を手掛ける一方で、武者小路実篤・志賀直哉・長与善郎ら他の「白権」同人にまで手が及び、今回それがまとめられて、「日本白権派与中国作家」として出版されるに至ったことは、この上ない喜びである。

私個人についていえば、1993年（平成5年）3月から4月にかけて、長春の東北師範大学に出講し、夏目漱石の「それから」を起点とし、それを受けた武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉を講じた。劉君は一日長春の旅舎を尋ねてこられて、

特に有島の「宣言」について語るところがあった。それから一年、1994年3月に私は岡山大学を定年によって退官したが、その記念論文集（「岡大国文論稿」22号）に、劉君の「『宣言』の悲劇」が掲載された。有島の「宣言」は「惜しみなく愛は奪ふ」で彼の理想的な生き方とした本能生活を実践に移したものだというのが劉君の結論である。私はこれを高く評価する。有島のみならず、武者小路実篤の「友情」もこの系列のものと私は見ている。岡大を退官した後の私は、広島の安田女子大学に転じ、そこへ通勤するために時間を取られ、劉君の依頼を早速に実行できない事態に陥り、心苦しく思っている。夏休みとなり、漸く寸暇を得てこの一文を草した次第である。

1994年7月19日  
日本岡山 新樹学舎にて  
赤羽学

---

## 序 一

日本古谚有云：“闻一悟十”。刘立善君可谓正是吻合这一古谚的最恰当的人物。1985年（昭和60年）4月，他叩开了我的研究室之门。我还记得，那确是由去年仙逝的冈山大学教授小坂晋氏的从中介绍。我问刘君的研究课题，他回答：“有岛武郎。”由于我采取的是对古典文学和近代文学不做严格区分、宏观地研究日本文学这一立场，所以，便爽快地承诺了这件事。初次见面之时，我向刘君建议：“倘若研究有岛武郎，重要的是要对其宗教忏悔方面展开思考，你应当以此为中心来进行研究。”这是因为，日本的近代文学受到基督教的影响之后，朝向所谓“告白万能”的方向发展而去，即：若把自己犯下的罪孽或者难以坦率倾诉的秘密，告白于公众面前，一切皆可得到宽恕。最大胆地实践了这一文学主张的，是作为自然主义的中心人物而颇为活跃的岛崎藤村。藤村受到北村透谷《各人心宫内的秘宫》这篇评论的影响。北村透谷在该文中提出，人无所顾忌地暴露自己心灵深处的秘密，即为道德高尚之人。于是，藤村以1906年（明治39年）刊行的《破戒》为开端，接二连三地发表起“告白小说”。对此，以《白桦》为阵地的人道主义这一派则认为，人的罪，绝非轻松得如果在神的面前，抑或在公众面前加以忏悔，即可得到宽恕。他们以这种思想与上述的文学现象相对抗。其中，有岛任右翼的急先锋。

刘君在我的指导下，认真探究起这个问题。1986年（昭和61年）4月，刘君考入冈山大学大学院文学研究科，他用了1年时间，专心致志，埋头这项研究，并于1987年3月刊行的《冈大国文论稿》第15号上，公开发表了论文《不忏悔的有岛武郎》。这篇论文主要以有岛发表于1914年（大正3年）1月号《白桦》上的《阿末之死》为中心，展开论述。札幌的一家贫穷的理发店的孩子，14岁的少女阿末，因为自己的过失，使姐姐的孩子和自己的弟弟力三死去了。其过失的原因，直至最后，阿末也没如实倾吐，终于服毒自杀。刘君的论文之趣旨是，有岛在作品中意欲描写出，人犯的罪是无论如何也消失不了的这一严酷的内涵。这篇论文，在有岛武郎研究会上成为话题，针对有岛的忏悔观，卷起了论争。两年之后，即1989年（平成元年）3月，至大学院修了之前，他撰写了数篇论文，统括作为硕士论文，提出了《有岛武郎的悲剧轨迹》。其后，刘君继而又在国语教育研究科从事了为期1年的《日中比较国语教育》之研究，于1990年（平成2年）归国。

归国后的刘君，其研究取得了更进一步的拓展。他除了着手于将有岛的《爱是恣意夺取》和《生活与文学》译成中文外，还将研究领域扩及武者小路实笃、志贺直哉、长与善郎等白桦派其他同人。现在，刘君终之于将这些研究加以归纳，作为专著《日本白桦派与中国作家》出版，这是无上的可喜之事。

就我个人说来，1993年（平成5年）3月至4月，我赴长春东北师范大学讲学，其内容以夏目漱石的《从今以后》为起点，进而论及了受其影响的武者小路实笃、有岛武郎、志贺直哉。其间，刘君来长春一日，访我于客舍。他曾重点围绕有岛的《宣言》，做了一番谈论。翌年，即1994年3月，我由冈山大学定年退官。在退官纪念论文集（《冈大国文论稿》第22号）里，揭载了刘君的论文《〈宣言〉的悲剧》。刘君的论文之结论是：有岛将自己在《爱是恣意夺取》中提倡的作为生活方

法的“本能生活”，于《宣言》中付诸实践。对这一观点，我给予了很高的评价。在我看来，不仅有岛，武者小路实笃的《友情》也属于这个系列的作品。从冈山大学退官之后，我转任于广岛安田女子大学。因去广岛上班，往复路途要花费很多时间，遂陷入不能将刘君嘱我作序之事立即完成的状态中，总觉得于心不安。今逢暑假，始得寸暇，草成此序。

1994年7月19日

于日本冈山 新树学舍

赤羽学

(赤羽学先生系原日本国立冈山大学文学部教授，文学博士)

## 序 二

像一颗新芽，立善的《日本白桦派与中国作家》，终于带着它富有生命力的稚嫩、鲜活和锐气、破土面世了。这确是件可喜可贺的事。

要说白桦派，或者有岛武郎、志贺直哉，甚至是武者小路实笃，都是我们不甚陌生的话题了。但是，几十年来，我们差不多重复着大致相同的内容和问题，关于他们的总体情况知之不多，更不要说和我国文坛的关系。有的甚至人云亦云、以讹传讹，陈陈相因，不加辨别。立善锐意要改变这种现状，开创白桦派研究的新局面。他不鄙薄前贤，也不因袭固陋，而是殷勤地广收博采，精细地推敲，并且敢于在前人的基础上，提出自己的见解。这种实事求是，不畏艰险，决不苟同的治学精神，正是这部著作取得硕果的坚实基础。可以说，他完成了自己的夙愿。

艰苦的生活和学习，磨练了他异常的意志力。从他的散文随笔中，我了解到，他曾当过放牛娃、庄稼汉。由于众所周知的原因，他从小就沾了老子的“光”，下放农村，小学毕业后，只好在乡村的生产队里劳动。但是，他要读书、上进，便在艰苦的体力劳动之余，苦读兄长用过的初高中课本，跟父亲学习汉语文学和外语，日文毛选和一部日汉词典，成了他珍贵的外文学习材料。那时，他学日语是要挨批斗的；便只好把单词写

在手心上，将词典藏在山坳里。几年的刻苦勤奋，使他在高考中脱颖而出，成为一名大学生、留学生。他没有辜负父亲的期望、祖国和人民的培养，终于学习成材。这种刻苦奋进、自强不息的精神，实在令人钦佩。

我有幸先读了他的书稿，又庆幸的是我们中日比较文学队伍里添了一位实干家。几年前，我还曾想，我们中日比较文学起步晚，队伍小，力量单薄，应急起直追，争夺我们更多的发言权。现在看来，这种焦虑似乎没有多大必要了。近年来，不少中青年，作为我们队伍的生力军，不断崭露头角，连连地推出力作，气势蓬勃，令人惊喜。我们的队伍壮大起来了。局面的改观，使我们看到了希望。像他们这些勇于钻研进取、自强不息的新生力量，会迅速地成长、茁壮，取得更加丰满、更加辉煌的成果；使我们中日比较文学这块园地，随着祖国的繁荣昌盛而更加瑰丽。我坚信，这不需要太多的时日了。谓余不信，就请拭目以待！

我这样祝福立善，也这样相信他们。

是为序。

赵乐甡

于吉林大学日研所

1994年9月30日

（赵乐甡先生系吉林大学日本研究所教授，中国中日比较文学研究会会长）

# 目 录

导 论 日本近代文坛的状貌与白桦派 .....	1
第一节 日本近代文坛前中期一瞥.....	1
一 近代文学前期.....	2
二 近代文学中期 .....	10
第二节 白桦派的创作个性及其成长过程 .....	18
一 武者小路实笃与《白桦》 .....	18
二 白桦派的诞生 .....	25
三 白桦派与美术的因缘 .....	35
四 白桦派的生命旅程 .....	62
第三节 中国作家对白桦派文学的审美共鸣 .....	65
一 中国现代文学接触白桦派的文化背景 .....	65
二 周作人 .....	69
三 鲁迅 .....	78
四 郭沫若 .....	86
五 郁达夫 .....	88
六 其他作家 .....	95

第一章 白桦派文学的思想特质 .....	98
第一节 来自托尔斯泰的影响 .....	98
一 日本引介托尔斯泰的时期及其影响 .....	98
二 推崇托尔斯泰的武者小路 .....	103
三 托尔斯泰影响下的志贺直哉 .....	111
四 深受托尔斯泰陶染的有岛武郎 .....	116
五 其他作家对托尔斯泰的共鸣 .....	122
六 几点总结 .....	124
第二节 白桦派邂逅梅特林克后的进化 .....	127
一 梅特林克作品的引进及其影响 .....	127
二 武者小路对梅氏的共鸣 .....	130
三 志贺直哉与梅特林克 .....	143
四 有岛武郎及其他同人 .....	152
第三节 白桦派的人道主义特色 .....	159
一 张扬正义 同情弱小 .....	160
二 反对战争 向往和平 .....	170
三 言出行随 付诸实践 .....	180
四 几点总结 .....	185
第二章 武者小路实笃与周作人 .....	192
第一节 “新村”诞生的背景及其理想 .....	192
一 “新村”诞生的前夜与理论准备 .....	193
二 “新村”的诞生 .....	200
三 “新村”的局限与影响 .....	205
第二节 “新村”中武者小路的文学生活 .....	214
一 武者小路的中心作用 .....	214

---

二 “新村”中的文学“三部曲”	217
三 《在桃源》与“新村”	223
第三节 与武者小路共鸣的周作人	226
一 与武者小路相识之前的周作人	227
二 《“为自己”及其他》与《人的文学》	232
三 “新村”迎接周作人	254
第四节 武者小路与周作人的沉沦	263
一 武者小路文学“失业的十年”	263
二 从反战论者到战争鼓吹者	266
三 周作人的彷徨与投敌	269
四 对武者小路与周作人堕落的思考	277
 第三章 有岛武郎与鲁迅	283
 第一节 白桦派诞生之前的有岛武郎	283
一 欧风美雨伴成长	283
二 美国留学的岁月	289
三 欧洲的艺术之旅	296
第二节 鲁迅译介有岛作品的独特眼光	301
一 鲁迅与有岛的早期生涯比较	301
二 有岛与鲁迅的亲子观和社会弱者观	305
三 鲁迅翻译有岛论文的动机	324
四 有岛与鲁迅的“易卜生观”	342
五 有岛——鲁迅接近欧美艺术的桥梁	350
第三节 《一个女人》与《伤逝》的比较	353
一 力反世俗、争求自我	353
二 《一个女人》与《伤逝》的悲剧	358
三 有岛和鲁迅的思想在作品中的表现	363
第四节 鲁迅对有岛文学思想的吸收与扬弃	368

---

一 鲁迅对有岛文学思想的吸收.....	368
二 鲁迅对有岛文学思想的扬弃.....	371
第四章 惠特曼·有岛武郎·郭沫若 .....	375
第一节 有岛与惠特曼的共鸣.....	375
一 有岛与惠特曼的接触.....	377
二 有岛对《草叶集》的评论与翻译.....	381
第二节 郭沫若发现了惠特曼.....	391
一 《叛逆者》——郭沫若接近惠特曼的通道.....	391
二 郭沫若初读《草叶集》及其他.....	409
第三节 惠特曼影响下的有岛与郭沫若.....	417
一 《草叶集》在有岛作品及思想中的印痕.....	418
二 《草叶集》与郭沫若的《女神》.....	426
三 关于有岛与郭沫若的比较.....	429
第五章 志贺直哉与郁达夫 .....	435
第一节 志贺直哉走向作家之路.....	435
一 活跃向上的少年时代.....	436
二 立志于文学的青年时代.....	440
第二节 志贺直哉与郁达夫的文学比较.....	443
一 郁达夫奈良访志贺.....	443
二 “私小说”和“自叙传” .....	445
三 志贺和郁达夫文学中的“性苦闷” .....	456
四 几点总结 .....	465

---

第六章 长与善郎同中国的因缘 .....	470
第一节 长与善郎与中国古典文学.....	470
一 登上文坛之前的长与善郎 .....	470
二 以中国为舞台创作的剧本及其他 .....	471
第二节 日本侵华时期的长与善郎 .....	479
一 长与笔下的“满洲” .....	479
二 长与和“文学报国会” .....	485
三 战后长与的自我批判与创作态度的转变 .....	489
第三节 长与善郎对鲁迅的印象及其他 .....	492
一 长与上海访鲁迅 .....	492
二 长与对鲁迅印象的转变 .....	496
三 对长与文学生涯的思索 .....	499
第七章 有岛武郎与梁山丁 .....	506
第一节 梁山丁接近有岛武郎 .....	506
一 梁山丁从文的发端 .....	506
二 梁山丁与有岛的接触时期 .....	510
第二节 有岛与《绿色的谷》中的小彪 .....	512
一 小彪同有岛思想的碰撞 .....	514
二 对放弃遗产的共识 .....	519
三 伦理观上的同与异 .....	524
第三节 《该隐的后裔》与《绿色的谷》 .....	528
一 殊路同归的自然描写 .....	530
二 同中见异的象征手法 .....	534
第四节 理想的美好与现实的酷烈 .....	538

---

第八章 白桦派与“五四”的开放意识（代跋） .....	541
第一节 白桦派对“五四”新文学的促进作用 .....	541
第二节 中国作家的“拿来主义”精神 .....	545
附录 .....	548
一 有岛武郎随笔选译 .....	548
艺术是“本能生活”的流露 .....	548
内部生活的现象 .....	555
填平深沟 .....	577
爱——致米川正夫氏 .....	583
余裕和文化 .....	586
答广津氏 .....	591
憎恶周而复始的生活 .....	596
告别佃户 .....	598
从私有农场到共产农园 .....	601
农场解放始末 .....	606
狩太农场的解放 .....	611
二 白桦派作家作品汉译目录 .....	615
三 主要参考资料 .....	621
后记 .....	627